

# ダンボール戦機メダル

エボリューション・システム

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

2046年——、強化ダンボールの発明によって、世界の物流は革新的な進歩を遂げた。あらゆる衝撃を吸収し、ほとんど無にしてしまう。革命的な未来の箱が、輸送手段の常識を覆したのだ。しかしその箱は、やがて全く別の目的で使われることになる。

ホビー用小型ロボット「LBX」の戦場としても用いられる様になった。強化ダンボールの戦場で戦う小さな戦士を、人は彼らを『ダンボール戦機』と呼ぶ。

しかしそんななか、ダンボール戦機を悪用する奴も現れる。後からダグを増やしますのでどうもよろしくお願ひします

思いつき系小説です。どうぞお楽しみください

# 目次

プロローグ	1
オリジンと出遅れ	6
協力：○○ぶつかったのはZX3!?	11
行動は高度に覚えてたか	18

# プロローグ

——気が付いたときには自分は地面に横たわっていた。

「……？」

目が覚めて周りを見てみると、壊れた瓦礫やコンクリートが散らばっていた。

あまりにも突然起こった出来事に、ただただ瓦礫の山をぼんやりと眺めることしかできな

きない。

ふと、右手に温もりを感じて、視線をやる。そこには30代の男女の姿が瓦礫に潰されて

れていた。

「いったい何が？」

その光景で、今起こった全ての出来事を理解した。同時に、込み上げてくる涙と恐怖、そして記憶が沸いてくる。

「トキオブリッジの……崩壊事故」

聞き覚えのある単語が頭の中をよぎり、理解の感情が芽生える。

とりあえず、瓦礫に潰れている男女に助けを呼ぼうと、立ち上がり、痛む脚に力を入

れて助けに向かった。

「…誰、か…!!」

大声を上げて、必死に助けを呼ぶ。溢れそうな涙を抑えながら、助けを呼ぶ

「君、大丈夫か?!」

「あつちに人が埋まつてる…助けてくれ!頼む…!!」

消防隊員であろう人に、男女の場所を教えて、その場で立ち尽くす。

「…」

ぼんやりと頭は、前の記憶を思い出す。

『「憑依」という形で記憶はそのままになるから、君は生まれ変わっても、大丈夫だよ』

「そういうことか」

この言葉に自分は思い出した。神様は確かに憑依すると言ったが、まさかこの事件で他人の死から憑依する事になる。このタイミングで用意したのだろう。

「だとすれば、あの男女は……」

この体の持ち主の両親なのだろうか。この場合、生き残れた事に、両親はほっとするのだろうか？それとも……

……これからどうすべきかなんて考えられる筈がなかった。

不意に、誰かの歓喜の声が聞こえた。

「…!!」

……マスコミか。こんなネタにして心から腐っているなんて思わないだろうな。

「……うっ……」

「…!？」

誰かの呻き声が聞こえたと思えば、目の前には白と黒の髪色でオレンジの服を着ている少年、幼き海道ジンがいた。

泣きながら両親を探すジンの姿をアニメやゲームで見たけど、現実の出来事には心が痛くなる。

だがそこで泣いている訳にもいかない。

「泣くな。強いだろ」

「え……？」

我ながら馬鹿な考え方だと思った。

コミユが下手な俺にはこれくらいしか言えない。それでも、言うしかなかった。

「お兄さんも、強いね…」

虚ろな瞳に光が差す。多分大丈夫だろう。

「…ありがとう」

「どうも」

「お兄さんは、怖くないの…?」

とても小さな声で、ジンは問う。

まるで車のエアコンで聞こえなくなるほどの声。

「ああ…怖いさ。怖くないのは変だと思うくらい怖い。だけどくじけたら…負けなんだよ」

「負け…?」

「そうだ。負けだ」

「これだけ教えとけば、楽になるだろうと思うが、やはり難しいな。」

「あの一ー」「いたぞ!!」

ジンが何かを言いかけたとき、マスコミの連中がこちらに向かってきた。



好奇の目で私達を見つめるマスコミに、ジンは怯え、私にしがみつく。しかし、ここで海道義光が来るはずだ。私は早々に立ち去るべきだろうか。

「やめたまえ!!」

その場に凜とした声が響き、声の持ち主はジンを抱え、マスコミを鋭く睨んだ。俺は今回の事件に大きく深く関わる人物をちらつと見て、その場を離れた。

## オリジンと出遅れ

俺はあの事件から逃げ出し、家に向かって帰っていた。

「(さて、憑依したこの体の記憶の通りなら、家は、ここだったな。)」

リビングのソファーにもたれながら座り、「これからどうしようかなと」呟きながら考えていた。

確か家に着いたら、特典を送ってくれるって言っていたけど……

「それにしても遅いな」

こうして待っているのに何も起こらなかった。

仕方なく、家を探索した。

「やっぱり、普通の家だ……な？」

何やら階段の下に扉がある。開けてみると階段が下に続いていた。

下に降りてみようと考えたが、このまま降りたら危ないから、玄関にあった懐中電灯を持ちスイッチを入れて下に降りて行った。

「ハ……………これは!？」

下に続いていた階段の下には大きな機械や工具が並べられていた。

「この両親が使っていたものか? それにしては綺麗だな」

俺は驚愕しながら研究所周りを見ていた。その後「『ピコン!』とパソコンから音が鳴り、見に行ってみると、メールが届いていた。

「なんだ? ……つ!？」

書かれてあったのは俺をここに憑依させた神様からだ。読んでみると、

『ヤッホー! 神様じゃよ。○○よ特典は送つといたぞ! 特典の内容は「メダロット7」

【S】後「アニメダ」のメダロット設計図と

「レアメダルとティンペットとアーマーが作れる ラボ」をプレゼントするよ。あつても、LBXをにしたメダロットは行けるけど、LBXは作れないからそこだけ注意ね。それに、とっておきのサプライズ! 特典にCCMやメダロットチそれから、LBXのコントロールポットを改良したヘルメットをやるよ! 使い方はパソコンにあるからそれを見て操作してね。

後、君の名前は、『<sup>アキナヤト</sup>明希奈矢戸』頑張つてね

PS : この物語は、終わったら装甲娘ルートだから気をつけてね』

「ツツコミありすぎた。それに、装甲娘って、確か最近のあれか」  
どうやら、事は終えてもやつかい事は消えないようだ。

「まあそれは置いて、早速メダロットをLBXにするために、作っていかないとな」  
先ずはメダルビートルの「メタビー」とヘッドシザーズの「ロクシヨウ」この2機  
を作ろう。

「……ちよつと待って、これ自動生？」

なんか作成ボタンを押したら、いきなり製造開始したんだけど。  
どうやら、自動で製造ができるようだった。じゃあ、ほつとこう。

あれから〇〇年、原作主人公山野バンから逃げ出しながらもメダロットとLBXの研  
究を続けた。

最近はビーストマスターとゴッドエンペラーの装甲火力調整。まあどちらも使う事  
がそんなない機体だからほつといてもいいか

あの事件の後、色々あったが、最終的にここに住めるようだ。食事が大変だから、アングラビシダスの大会で刈り続けて得た金と刈った金で西日本、大阪大会を優勝をした金で生活費を稼いでいた。強さとオリジナル機体で謎のLBXプレイヤー、"アラセ"として名を輝かせている。

「そろそろ完成か」

今度作ったLBXは『赤い悪魔』"ブロッソメール"悪魔型で射撃型の機体。メダロットとして大きくできるしLBXとして使えて、さらにコアスケルトンには色々いるが、メダロー本で解決できる。今のラボはそんなこともできるようになった。

「それにしても原作はいつになったら、動くんだろうか」

いい加減退屈してきた。

『おい、一回休んだらどうだ?』

突如俺のCCMから声をかけられたのは"メタビー"昔からの愛用でメダロット系ゲームではカブトバージョンばかりをプレイしていた。

「……そうだな。一休みするか」

俺はメタビーに言われた通り、研究所から出てテレビを付けてニュースを見た。

『今日、財前総理が"《ピッ》』

「やばい、始まってたわ」

『……マジかよ』

どうやら出遅れていたようだ。

協力：○○ぶつかったのたのはZX3!?

「(さて、今頃バン達は暗殺阻止に精を出しているだろう。だが俺は動きたくても動けない。だって、もう暗殺位置に財前はいる)」

つまり、助けに向かいたいけど間に合わないと言う事。

「参ったな」

俺はこの状態で出来ることは、LBXプレイヤーが集まる最強場所、アルテミスに向けて強くなるしかない。だがその前に。

「よし、アキハバラに向かうぞ」

『まさかロボトルか?』

「まあどつちでも良いが、あそこにいるオタレンジャーとオタクロスに合つて助けが欲しくて行くしかないからな」

それから俺は、CCMをポケットに入れて財布を鞆の中に入れ背負いアキハバラに向かった。

アキハバラに着いた俺はアニメでは登場した場所、〃アキハバラタワー〃に向かった。

そしてそこに待っていたのは同じ頭と服装をしているが5色違う5人組が待っていた。

『我ら、愛と勇気のLBXバトラー…オタレンジャー!』

登場言葉が長いから聞き忘れたよ。

「オタレンジャー、オタクロスに会いたい。だから伝説のLBXを渡して欲しい」

「良いだろう。渡してやろう。ただし、我々を倒す事ができたらだ。トオ!」

オタレンジャーのリーダー、ユジン。またの名をオタレットはDキューブを投げ、大きなバトルフィールドに変わったジオラマは『現代都市』。ビリンバードブルーとピンクが戦っていたステージだった。

「ゆけ、イエロー!」

「う、うん。わかったのね」

ポーズで決めて仲間の誰かを言って、相手はイエローになった。

「行け!ビリンバードX-3!」

「やるよ、〇〇〇〇」



「……結局あつけなかったな」

奈矢戸はオタイエローを倒し、エレベーターで上に上がっていった。

「そろそろオタククロスに会える。なんとか説得してみるか」

エレベーターは最上階に着き、ドアが開いた。見た目はアニメとは変わらないが、原作のハッカーが喜ぶような場所だと感じた。

「よう来たの〜明希奈矢戸」

「どうやら、俺の事を知っていたようだ。多分アラセと言う名も知っているだろう。」

「……知っていたのか？俺を」

「ワシはなんでもお見通しデヨ」

「なら頼みがある」

「お前の願いは知っておるデヨ〜だが断る」

アニメと同じ展開だな。

「ここまで来たのか？」

「断ると言ったら断るデヨ〜」

「そうか、じゃあ帰るな。話が聞けないなら一人でどうにかする事だ」

オタクロスのお断りに奈矢戸はエレベーターに戻ろうとしたが、オタクロスの「待つデヨ！」の言葉に足を止めた。

「分かったデヨ。願いを叶えてやるデヨ。しかーし！ワシに勝つ事ができたらデヨ」  
「……良いだろう。受けて立つ」

オタクロスはポケットにあるDキューブを投げ、大きなバトルフィールドに変わった。ジオラマは『闘技場』オタクロスアニメでもゲームでも戦っていたステージ。

「Z X 3 一号機！Z X 3 二号機！Z X 3 三号機！」

「(どちらも変わらぬ初合体型L B Xだけど “we a” 型には遠く及ばない)」

「破壊しろ、ビーストマスター」

we a 型の第0号でもあり1号とも呼ばれる軍事利用を視野に入れたメダロット、ビーストマスター。

現れたのは、弾薬を大量に詰め込んだ両腕とコードで埋め尽くされた脚部が特徴でもあり開閉可能で凶暴さを覗かせる顎はまさに

“獣” というL B Xだった。

「なんデヨ?このLBXは……」

オタクロスとはあるLBXプレイヤーは知っていたどこにでもいる普通の少年。だが過去、都道府県大会や誰も知らぬ者はいない世界大会、アルテミスに出場し優勝したプレイヤー。ただその優勝プレイヤーはいつも服装を変えて、名前も偽りの謎の存在として都市伝説となっていたが、オタクロスが調べてかの少年である事が発覚したそれが奈矢戸だという事。

「(そんな優勝者が使っているLBXは特殊じゃった。どれもオリジナルのLBXばかりでその作りは子供心がある虫やら動物。じゃがその性能は今までのLBXとは違っていた…じゃがこのLBXは)」

「(ビーストマスター……まるで本能で動く獣王。まさに名前の通り同じじゃ)」

「それじゃ始めますよ」

『バトルスタート』「戦闘bgm。 魔の十日間」

「(この不気味なLBXは舐めてかかったら、痛い目見るじやろうな)いきなり全力でいくデヨ!」

オタクロスはCCMを早技で操作し、3機ともバラバラになつてビーストマスターに向かつてゆく。

1号機は遠くから射撃、2号機と3号機は左右からの挟み討ちで仕掛けてくる。

「ビーストマスター、殺すなよ」

ビーストマスター専用特製の脚部、スパゲティには特別な機能を付けていた。

コードで2体のLBXを捕まえてビーストマスター正面の前に手を合わせるかのようにつつけた。

「なんじゃと!?!」

オタクロスは脚部のコード捕まえるとは考えていなかった。さらに予想外の展開にその2機を別の1体に放り投げた。

ぶつかり3機とも転がっていたが奈矢戸は躊躇なくデスビームを放った。着弾した場所は煙で覆われた。

「デヨ〜!」

煙が消えて3機とも姿を表したがどれも光った。

「俺の勝ちで」

勝負は終わり、これからもこの先協力してくれるようだ。

奈矢戸はエレベーターに乗り降りてアキハバラタワーから出た。

「せつかく此処に来たからな。なんか食べて帰るか」

「こんなにもご馳走がたくさんあるのに食べないのはもったいない。「何を食べようかな）」と考えながら歩いているといつの間にか見知らぬ人とぶつかってしまっようだ。

「あの…大丈夫ですか？」

「いえ…あーしも油断しておりまし…あー！」

ぶつかって尻もち着いた少女に手を差し伸べて謝罪して少女は手に取り立ち上がるうとしたが、少女は地面で2匹の人形が汚れてしまった。その事に、その後奈矢戸はその少女に頭を下げて謝罪したが、どうやら駄目らしく。

奈矢戸は困ったが、仕方なく弁償になるかもしれない物を2つ渡した。

「……………これ、あげるよ。お店とかに売らずに持ってたらいよいよ」

これがまた、新たな未来が訪れる様な出来事でもあった。

## 行動は高度に覚えてたか

エンジェルスターのストーリーは残念ながら出る事はしない。理由は簡単だワザワザ目立つ事は避けたいからだ。

仮にもし、いけない状況で出てきたら、敵も注意してくる。

「しばらくアルテミスまで我慢だな」

それまでにメダロットの機体およびメダルの製作を続けなければいけない。

そう言えば、コントロールポット。あれみたいに一体化に出来たらいいな。まだ時間あるし、作るか。

と頭で考えながら、新しいものも作る。ダンボール戦機の機体は好きでもあるし、何個か買って改造に使っている。改造と言っても、風間キリトみたいなスゲールBXにする事だよ。でもレア物は改造に出来ずコレクションにしているが、メダロット達の心で考えると、可哀想だな。出来ればいい奴に使って欲しい。

「皆早く席に着きなさい」

「(おっと、もう時間か。やっぱ妄想は早いな)」

「せんせー！今日転校生が・・・」

「転校生、もうそこまで来たのか？」

その時、耳をつん裂く音が聞こえてきた。俺は窓側の席なのでふと目を移すと、何か飛んできている。さすが戦闘機だ。

「せ、戦闘機?!」

「ぶ、ぶつかるー!」

「(……なんかちよつと早ないか? 3分も経ってないぞ)」

突撃してきたが原作知ってるし、学校の窓に上手く上手に戦闘機をぶつからないだろう。

その後に海道ジンが降りてきた。

「(昔の事覚えてるかな? どっちでもいいけど)」

「君が、山野バンかい?」

……妄想しようとしたが、先生の奈矢戸君の隣の席って聞こえて、妄想から現実に戻った。

「(なんでよりによって席が俺の隣なの!? 感動の再会とやらは興味ないのに)」

海道ジンの席は俺のだったことに、心で慌てていた。

「明希奈矢戸」

「…ん、どしたの？」

「……放課後、屋上に来てくれ」

「ジンやめとけつて、奈矢戸は付き合い悪いから」

「えー…まあいいや」

「……え？なに？何でジン以外わざわざ何だ？皆の頼みを断っているのが、まさかいい発言でアレか？まあ…どうでもいいや。」

「それで、ジン君どうしたのかな？屋上で」

「…君は、9年前のトキオブリッジ崩壊事故を覚えているかい？」

「あーあれか、忘れるかよ。あんな事故。」

「……ああ、覚えているよ」

「単刀直入に聞こう、君はあのとき僕を助けてくれたのか？」

「ジンの言葉に黙る奈矢戸。ま、言わないといけないよね。」

「多分、そうだと思うよ。記憶だったら、オレンジ色の…まあ服の種類は全然知らないか



ら、そんな少年は覚えてるよ

「……いや、君の持つ雰囲気は同じ年には見えなかった」

「ホー」

ジンはそのときはありがとう、と微笑む。そんなに良いことをしたんか？

「…変わったな」

「君は、口調以外はあまり変わっていないな」

「いや、元から口調はこんなんだよ」